

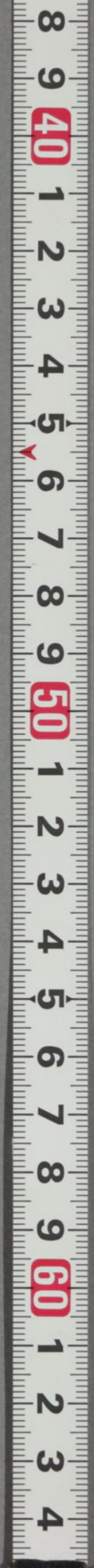


近世櫻田紀聞

六 三編 中

六七

13
3307
6



天正 13
3307
巻 6

長門

舟



舟

井伊家の
忠臣深疵
あつて敵を
追ふる

大正十一年八月廿九日
寄
本大學出版部

道

近世櫻田紀聞卷之七

第十三回

東京寄留 松村春輔著述

第二十三回

再説大老の行列は狼藉者ありて、鬨ひ頗る歎難のよし、
 億病者の逸足早く追々注進及び、うの彦根邸は結
 居の殿原開を一大事と押取刀は御門に至ると東西も
 分ぬ大雪降りの其中は鬨ふ聲の所りきと敵味方さ
 別ちあら、乱雑火急の主人の當難當るを敵と盲目討ち

腹

恠りし程は敵方る凱歌を上げ、引取うし跡の雪も
 風晴も味方の手負打死の僅は倒れて蠢くを或は
 駕籠は補け入也或は背負し郎内は擔持し行を郎内の
 其雜沓のいへもあはむ然るを此儘止むべきありし
 將軍家へ届け出らるる書附の馬は、
 今般空疎掛外櫻田松平市正門旁より上杉彈正太
 彌辻あふと聞ゆ、狼藉者銃砲打掛凡式百人餘
 拔連駕籠と目懸々切込長身供方者共防戦す

櫻田日記三

二

指日終日

一、狼藉者、其人抄留其餘、多祇、係、多、負、多、有、悉、
近、告、
申、以、批、者、後、捕、押、方、指、揮、終、以、如、怪、我、終、以、間、
一、下、先、為、宅、終、以、不、供、方、即、死、在、負、之、者、別、紙、之、通、亦、
終、以、此、段、亦、屆、申、上、不、以、上、

三月三日

井伊掃部頭

別紙

係、手、
日、下、終、三、弟、名、為、
片、桐、權、之、助、
手、疵、

即死

川西忠左衛門

同

澤村軍六

多疵

櫻井伊三郎

係、手

小河系秀之丞

同

柏系徳之丞

即死

加田九平次

係、手

永田大弐兵衛

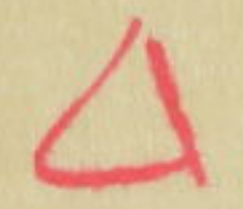
係、手

草刈敏三郎

櫻日巳月三日

三

貞	貞	貞	貞	貞	貞	貞
松井貞之丞	萩原吉次郎	穀名源次郎	元持基之丞	渡邊泰助	水谷求馬	藤田忠藏
深	深	深	深	深	深	深
岩寺徳之丞						



草履取	六尺	手疵	以上
吉田太郎兵衛		弥右衛門	武拾二名
勝五郎			

今朔掃部頭登母掛控途中狼藉者之内幸人付留被

と付多きうも可お裁裁与屋敷内を引取置申上
此段涉届申上後以上

井伊掃部頭内

三月三日

木 俣直次

右又記せ討死の死骸ハ指田重藏あり山口辰之助鯉
淵要人ダ八代洲河津は自裁せ届けの馬一
八代洲河津織田兵少捕日刻辻番所出づ場之内
士歸之者あ人正疵と信お果すハ後辻番人の中此

斯

ゆる子と産産裁指子足信り妻とお遠女所存入急
あ人附蓋すハハ後辻届申上以上

三月三日

徳井米太郎

茲井伊掃部頭直弼も手疵を負ひハハ
出ら悉けり中翌四日頭痛疵所又痛之登城
見舞あるべき中ノ口達あり
御小納戸頭取

三月四日 御使者

塩屋豊後守

其方儀容躰如何有之哉為御尋

人參一箱以御使者被下候事

又三月七日御使者御使者

御小納戸頭取

三月七日 御使者

田澤兵庫頭

其方儀容躰如何哉猶亦為御尋

一 氷砂糖

壹壺

一 鮮 鯛

一 折

右以 御使者被下候事

尚掃部頭被下候御教書

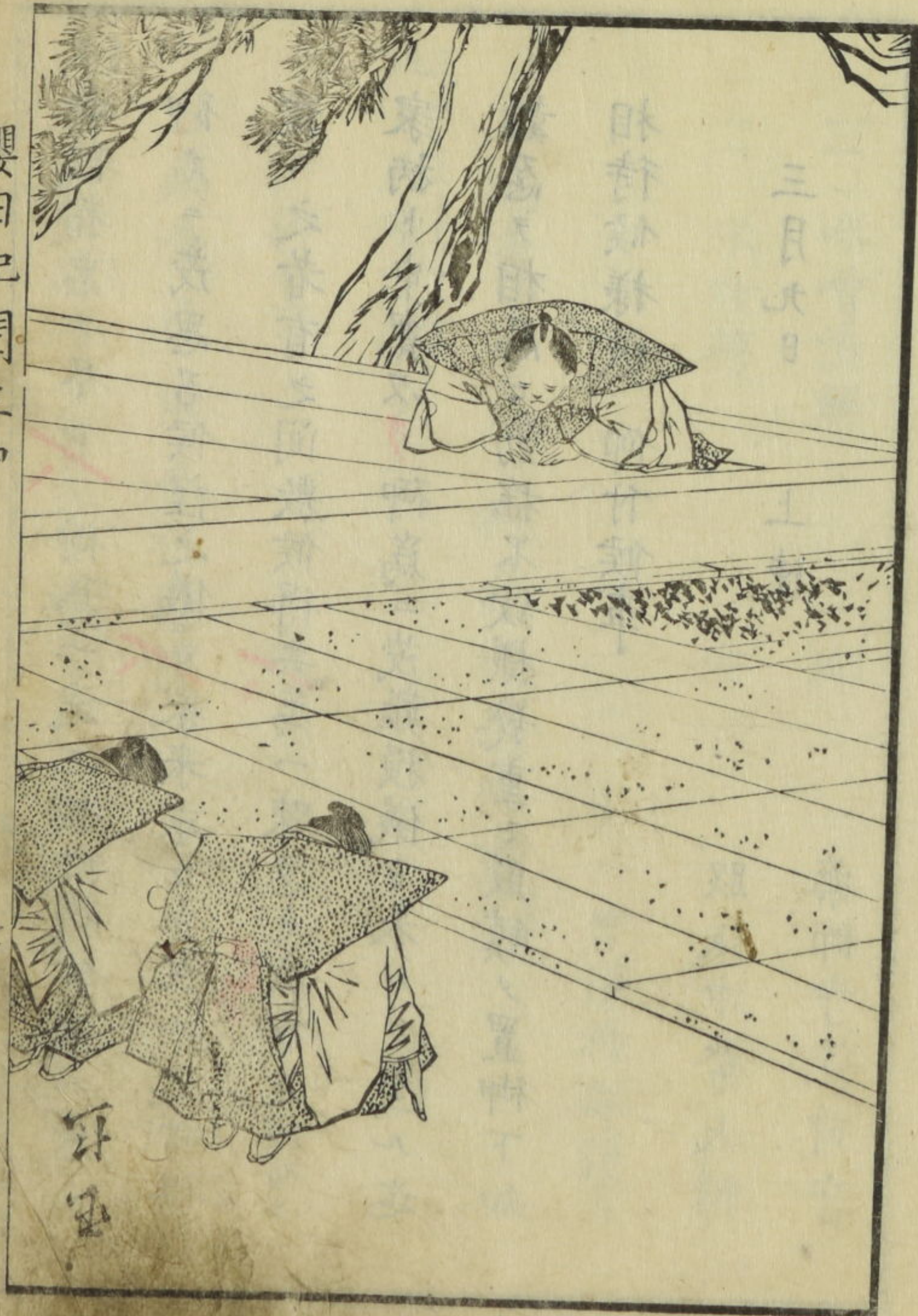
此度不慮次弟家来未々迄如何計殘念可存与

無此上 御心勞被遊候及乱妨候者共御大法有

之訖度御詮議被及候事付萬一家来共騷立候

様之儀有之候而天下之動乱可及其方家来

之儀ハ搭別之譯柄殊當時重キ御役ヲモ相勤ノ



格段精忠ヲ尽シ、御爲一途ニ相心得候儀ハ兼々
御力ニ茂思召候程之儀、~~其~~家来未々ニ至ル迄心得
違ヒ之者有之間敷候得共萬一疎忽之族有之候而ハ
家柄ト申實以、御爲ニ茂難損儀与未々ニ至ル迄
難忍ヲ相忍ヒ動搖不致様幾重モ取鎮メ置御下知
相待候様被 仰付候事

三月九日 上使

服坂中務大輔
藥師寺筑前守

一 味噌漬鯛

一 折

二 氷砂糖

一 壺

并伊掃部頭

右病氣之付爲 御尋被遣候事

此日天璋院殿より

一 御重

二 組

右病氣爲 御尋被遣候

彦根邸ハ斯レ之御尋被遣候事、其愁哀ハ

嬰日巳月三日

八

まゐらん 茲は蓮田市五郎の 大関等五個内藤紀伊守へ自
訴せんと進む行くと後より蓮田氏をさうくと呼ぶの
あつ小市五郎のイミツの後ろを見とる黒澤忠三郎佐
野竹之助齋藤監物あり 三個俱小重疵もさう歩行もゆる
やうの躰ありけるゆ蓮田市五郎の這の三個を補けつ
見付の番所へ至り 御老中の御役宅を御案内願ひ申上
と云入もつけさの列座ありける番人等ハ血も染まらる
四個を見るより 魂消へて 腰さえ抜く 齒の根もあはぬ

隻振ひ一言だめも答へずと成散々小遣げ去りけり
蓮田も今ハ困りゆん笑ひあはるも亦引返り八代洲河
岸を過ぎける時ハ山口鯉淵兩個ハ既ハ自裁の跡ありけり
蓮田も夫より奈何めも田安殿よりさうり一封の書附を
呈せんとい憶ひあはるも齋藤等ハ序次よりさう深疵の
痛も堪ぐさあん見へけさの遂ハ照坂彦の郎へ至り
仕細を逐一訴へけるは待事稍久まらる内女関へ
通さる家老尚掛りの役員等出張し 支實と尋らるる

蓮田五郎三郎

よより蓮田を懐中お認めりあり一封を出し役員は渡
せしうい卒とく之を受取りつ成奥の方ふ入りける
が未の刺は至り醫師来りて疵疔と珍察め其の手當を
做さすくせしうが蓮田市五郎のいへるゆゑ我等皆死と
決心し今療治を乞ふも不本意あり寧生を得ず耻と殘
さんより屠腹あさんと既覺悟の躰あまの黒澤之と
止めくゆふ大丈夫何ぞ徒容死に就ぶると茲小至へく
蓮田も死を止まりける日已暮んとする頃照坂侯

よより申し渡さるゆゑ

水戸様浄家来

黒澤忠三郎

佐野竹之助

蓮田市五郎

齋藤監物

右者思召有之石谷因幡中津引渡を遊

後もの

蓮田五郎三郎

焦々四個も石谷因幡守が邸は護送せしむる其夜亦細川
侯へ御預けと做りし小佐野竹之助も深疵の痛を翻し
くく同夜細川侯の邸より身より包ける是より大関森
杉山森山廣岡等の譚は移り尚関 鏑之助廣木増子岡
部海後等が傳を漏れ緋あく第六の巻は説出せしを視る
可

第拾四回

却而説黒澤忠三郎佐野竹之助蓮田市五郎齋藤監物の

四個を照坂侯は自訴做しけむる其夜細川侯は御預け
とありしは佐野竹之助も深疵の痛を強くく同夜遠
小落命は茲も亦大関和七郎森 五六郎杉山弥一郎森
山繁之助等の櫻田の退口より直ち小細川侯は自訴
逮ふ其時四名より出せし書附の馬

細川家書附を尋ねる書附

私共國許二月十六日如立きあ人の潜伏仕今綱
愛宕山台同志者拾七人お掛まの外掛田松平大

櫻日己月三
櫻日己月三

隅守殿侍を殺と過當の間に杉居井伊掃部頭
換取の籠に左右より仕懸を付し一物に三人
数に立塞り世間難く及その内四人半より以て
籠に左右より馳舟の籠をとりし留滞し其の
清首の討取凱歌を揚ぐ籠に散るに杉居井伊
右衛門左衛門内四八辰の口津屋敷の門に八
仙の和の吹と流す二月水戸殿家来と今朝
井伊換を討取し其の内四人半より以て

何れもあつて候はし方極む候也
と儀、清哉許お侍者等候に以て其の末速に内
出首より其の口津屋敷の細く候人序
重役の口津屋敷

- 大関 和七郎
- 赤林 五右郎
- 杉山 孫一郎
- 赤林 繁之助

櫻日己月三

十三

右に花橋東錦と小櫻田一舉の一本より抄録する所あり
 蓋し届書の文章彼の四名が作る所とせを其拙ある所
 より人と做りも随つと馨しうと思はるるをどと這も
 大関等が自書出せし届書はの緯と所傳え暗は東錦の編
 者つ恁物せしありん東もれ西も是事實の臻うと聊
 だも疑しうらざるを視る亦誠の顯出るべく恁
 四名も其儘細川侯へ御預けとありしが連田等と時刻の前
 後より居る所も亦異ありけり然るも齊藤監物の

疵所の痛を日増募り外療の術其甲斐あく同八日の
 朝己の刺終は鬼藉小入うが響は佐野が死骸と共に
 瓶は納め細川の邸より幕府の指令を得り池田播磨
 守が役邸は送らるける復海後碓砦之助廣木松之助を
 凱歌を揚ると衆は先ん外櫻田を駈抜く何が包く
 物を携へ容鉢を愛し一目さん小舟搞道を急ぎ何
 地ともあり差方を故郷は飯る錦の家土産をさるるあり
 ぬら筑波根の峯より高き君恩は報ふ心の底深き男女

川瀬の水ありを彼の海廣の兩個に其後行衛元知はる
まける胸あり忠の関を居心を堅き鑛之助を既は其
を引揚て一先西國の方へありと芝口まどを至り
うろど素より數ヶ所の手疵を負ひ茲に至る一足
進を行軍能えざる世に之まると心を決し聽て芝の
汐留橋の欄干に寄り菟り短刀をもる咽喉を貫き水に
投して死たりける
因は云関 鑛之助を闘ひ果しより再び水府に

取り後北國に至り捕縛となり江府に護送せしむ
たるより書するもあまどこれも信用する不足る證
あまど書に余が著述所を彼の花橋東錦の説によ
る暫時這は引用を然も其の是とせらるも亦
のりありん

三月四日井伊掃部頭家来より幕府へ出せし書面云
掃部頭昨日登城し市に於途中狼籍

昔有之長安有之者共水戸換并控平
修理之交換以家来之親亦家申之
掃部頭之負申之候程之儀之付時
清遠之親も以家来得共何ふ家来
昔其其候暫時も親在沙捕押之
主事候りて清渡之由成家来之者も
子細極之由得度と一同懇願仕事何奉
以憐宥りて願之通り新御付給候段

老之願之候上

井伊掃部頭家来

岡本半助

相馬隼人

即夕幕府上即夕幕府上岡本半助岡本半助と呼び出呼び出し尤尤の通り通り達達せせららるるり

願面々難引渡助之由事

恠恠く幕府幕府もも此此度度一舉一舉の事務取事務取組組ののため三日三日の昼昼迄

松平伯耆守
御勤定奉行

の役員と更^まに詮儀^{せんぎ}掛^かりとせ^しらる

寺社奉行

松平伯耆守

大目付

久貝因幡守

町奉行

池田播磨守

御勤定奉行

山口丹波守

御目付

駒井山城守

松平伯州を始^はめ^め惣議^{そうぎ}の^う人^{ひと}餘防^{よぼう}の手當^{てあて}嚴重^{じゆうじゆう}と^り即^{すなは}日^ち

其向^{まへ}に達^{たつ}せ^し書附^{しよぶち}の寫^{しり}

松平肥後守

酒井左衛門尉

松平越中守

大久保準之助

今朝掃部頭登^{のぼ}城^{しろ}掛^かヶ水戸殿家来共及乱妨候^{らんぼうこう}付

テハ此上水戸表ヨリ若多人數出府致^{いた}シ候儀モ有

之候^{このころ}々^々時宜次第可及沙汰^{さた}出間早^{はや}々^々人數差^さ出

茲積^つ兼^か而^{して}等^ら可^し申付置^{まを}出^で事^{こと}

翌日巳開三中

壯士包と
を携え
常陸の國
に還る



河彦直



平塚中井

榎田紀伊守

右ハ内藤紀伊守役邸より各其家臣を召し達せしむる尚
復同文より久世大和守土屋采女正土井大炊頭牧野越
中守戸田綏之助等も嚴に指令あり當時に至り水戸
公より幕府の爲に復一層の嫌疑を請らしけん礪川邊
を殊更に防禦せしむるの勢ひあり其故も同月九日に至
り内藤紀州より竹橋御門清水御門田安御門半藏御門
の通行を止めらしむるの事も知らるべし這は最迷惑
ある側杖を蒙むらしむる咄あり并ハ松平大隅守片桐

石見守戸田七之助の三家あり同十二日之内藤紀州
の役邸へ出頭あるべし之違ありけしむ松平隅州の
名代を岩瀬内記片桐石州を三浦美作戸田の名代を小
倉新左衛門あり然るを内藤紀州を大目付伊澤美作守
と立會より件の名代人は申渡さるゆへ去る三日外櫻
田に於て重き御役人へ對し多人數狼籍し及ぶの時人
數をも差出さる心得りと等閑の儀不束の言ふより差
扣を仰せ付らし候ありと所り件の名代を逸足早く

榎田紀伊守

櫻日 己 月 三 日

邸は飯り表裏門閉しし重役始め遠の集會動し御首
尾を取直し一時も速く御免を做さんと夫より賄賂を
蔣散し若干金の功能顯せし御免の沙汰しありしとを
憚り復幕府より猶も餘黨を捕押しんと東江市街を
云も更あり水戸街道をも嚴重に餘類捕縛の間喋らる
る心と盡き折しも確固としたる手蒐りもあらず時
日を過しける茲は廣岡子之次郎も手疵を數ヶ所は負
ひしと有村治左工門が跡は付きし辰の口の方

走らんと日比谷御門まがりの漸くありて至りし疵所
序次は痛を烈しく鮮血流まく泉の如く心神俱は勞色
果す逆も堪へずも思わざりけん短刀抜きし我と
咽喉を貫き死しけりける夫より廣岡が死骸の例の如く
町奉行池田播磨守が扱ふ所とありぬ憚り増子金六郎
岡部千次郎兩個を櫻田を馳遁す夜は昼を繼つ三月
十日あゆり二日の頃大坂は着せし遠地も緯の嚴し
けし身と寄んも便宜を得ざる鬼角も兩個を談

櫻日 己 月 三 日

櫻田日記 卷之三

合あ増子まこも九州路きゅうしゅうぢの方かたは下くだり勘かんの知ち己ぢを便べんるべしと
茲こゝも袂たもとを別わかちて其その後あと増子まこの落おち着つきを奈な何なにあり
や知しる人ひとあり一ひと程ほどは岡部おかべ千次郎せんじらうも増子まこと別わかき
夫それより身みを商人あきんどの様ようは換かへ再またび路みちを東あづまへ取とり日ひを
経へて江え戸どは飯いううと素もとより其その日ひの一ひと泊とまりを頼たのまんと
まゐる家いへもあつとも皆みな其その時ときの嫌疑けんぎは滞とどりて進しん退たい既すでは谷や
まううが今いま宵よ一ひと夜よを明あつあつ明日あしたを當あた地ちを糞くそ豆まめ做し
復また北きた陸りくは走はらんとは是これも暫しばし住すま家やとせし浅草寺あさくさじの

歩あ意いあり歩あも馬路うまぢを浸ひみ歩あり来きり最早もとも田町でんぢの
央なかを過すぎたり茲こゝも岡部おかべの胸むねは問とひ腹はらは答こたへて足あしを
速すみめ今いま宵よを郭内くわくうちより仮寐かりねしと明朝あすもぞせん術わざありあ
と新吉原しんきちげんの大おほ門もん側かた五十軒町いそげんぢより平松ひらまつと喚よぶ引手茶ひきて
屋やは入り来きり常州じやうしゅう来湖きこの商人あきんども二葉屋ふたばや三右衛門さんえもんと
りゆる者ものありと偽名いつはりなを做あつ謂いひ込こみ彼かの平松ひらまつも
這人このひとは櫻田同志さくらだどうぢの壹人ひとりなり且かつ知しるよりあつぎは
唯商人ただあきんどの如ごとく小饗應せうおんし例れいも遊里ゆうりの習なひも早速妓樓はやすみぎらう

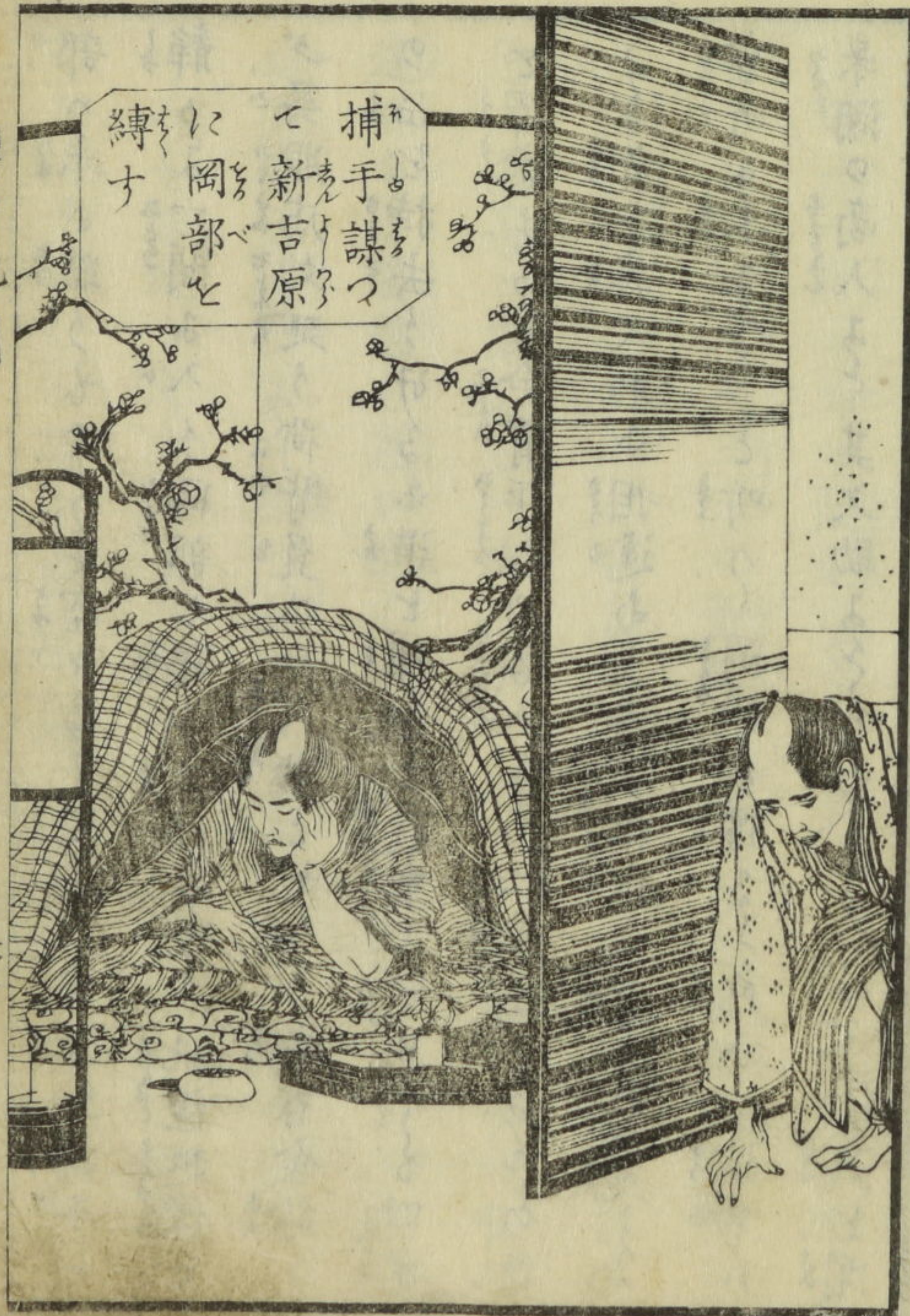
櫻田日記 卷之三

云遣りつ夫より酒肴藝者あつて準備早くも出来し
 卒御供と香版又火を點じつ先立下婢は連れらる
 二葉屋の岡部共は大門を這まひ名を負ふ仲の町岡
 の弥生の植櫻黄色あま山吹の花は籬の夜の花眺めを
 ある外世界實は此里の風景を四季をくくの仙境と
 ころ更は耻さるべし徳平松の送り者も江戸町貳
 町目より大廊と稱へたる泉屋清藏が抱ふ其頃全盛
 ありと評判せし娼妓大淀が座敷に送り今宵初會の客

人ある二葉屋の岡部千次郎が相方と萬事の送り平
 松と番頭新造が計らひより夫より酒宴の儲けあり酒
 の氣鬱を散せるものうら岡部もろく興入り其儘
 伏床に入りよけを承る程は復幕府より尚も櫻田黨
 餘の者を殊嚴密に探索するゆゑ既は其夜も新吉原と
 残り隈あつて調べけるは五十軒町ある平松も探索
 その入り来り客人の姓名を逐一尋ね聞けるは常州来
 湖の商人より二葉屋三右工門とりんる仁を久し来

人あつたやと問もさう渠の左はあつた今宵始め来
 らるる知已の客あつたあつたけりけり件の探
 索掛まの思ひ合はる緯やありけん猶人相を所糾何
 が所持せし品物を這家は預けあつた一見あつた
 と云儘は主人を宵の程は二葉屋三右衛門より預けらる
 風呂敷包を取出し立合あつた開き視る古布子一
 枚は短刀一本ありけるを探索掛る一見見るより此
 短刀を所持するより正しく水府の浪人疑ふ所ある

べりりり捕遁さぬや捕縛あさんと尚も氣振を知ら
 さぬため平松の家内の者を最嚴重は云含め夫より岡
 部を縛さんと頼り準備を做しけるは素より岡部を
 剣術のそかを柔術さをも達したる一騎當千ともいふ
 べき者をカ業より捕らんとせし十は八九を危ふきの
 ろり捕も逃さる這後の餘黨の手蒐り覚束ありと物よ
 練る捕縛の小吏等岡部千次郎が遊び居る泉屋が樓
 上に至り案内の者と打連ぎ件の座敷に来り見よ岡



捕手謀つて
新吉原へ
に岡部を
縛す

櫻日記開三

九三



博田然閣三

毎
查
査

部ハ未もど睡ねうも中ちゆう々々空くう々々とてあけけるを捕手とくてハ
 静しずうま一ひと間まみ入いう岡部おんべと起おこし云いけるや此こ程ほど越こ後ご屋や
 ガ呉服店外廻こゝろり荷背負にせひの久助きゆうすけとりける者もの百金餘ひゃくごんあまり
 の品しなを持去もつりける小渠せうきと捕とんと最重さいじゆうよ今日けふも四し方ほう
 と探索たんさくするは今宵平松こよひひらまつの客人きやくじんも二葉屋ふたばやとあんのひ
 くる者ものを其久助きゆうすけハ相違さうゐありと訴出うたる者ものあれは是こゝより
 會あひ来きるべしと听きつ岡部おんべを懼おそる色いろあく拙者せつしやハ
 来湖きやうこの商人あきうしも其久助きゆうすけもあつと聞きく

と捕手とくての者ものを开ひ間違まちがひあるべしと一先會ひとあひ
 来きり多おほく訴人せうじんの三井さんせいの番頭ばんとうも合あひあを白黒しろくろ分わるべし
 と強いく誘よひ行いくんとするは岡部おんべも之これを容易やすくあもひ
 信しんる渠等きやうとうガ謀畧ぼうりやくとの神かみあつぬ身の知しるよあく唯人ただひと
 違ちがひある災難さいなんと思おもひ濟すしと捕手とくても向むかひ素すより人の相あ
 違ちがひあるとも行いむが猶なほも疑うたぐをまん然ぜんと事ことの分わり
 うんも今晚こんばんも飯いるべし手て數かずと頼たのむと云いひ
 ぐ法はふの如ごとく縛ばるべし信しんて捕手とくてハ仕澄しましと

夫より會所又連行きつゝ有無をも糺さず本繩は岡部
 を堅く戒めり明日とも待たぬ網衆物も其夜の中
 町奉行池田の邸へ擔持て行き獄中は固く繋ぎける這
 時にも岡部千次郎我と知りつゝ駈究し捕らへらる
 を悟るゝも今更せん術ありと名を陰し同
 盟の誓ひを背くものもあらず終りの朽名を取りもや
 せんといふを礎とする勇士振舞其後第一席の糺問あり
 櫻田同志の壹個ある岡部千次郎あるよりと自ら訴へ

法庭より最目覚し櫻田の一擧を逐一辨白せしとを
 再説く岡部が縛は附うんとする時新吉原の平松あり
 探索人が包を改め其中ある短刀を一目視るより其の
 入七水戸の浪士と知りたるを奈何ある故と尋ねる
 先年水府老公が腹心の壯士等數名は短刀多く賜り
 繹ありき今此短刀も其の品の一つあり岡部千次郎も
 賜りしものなるべし且て短刀の持へる咸一様なり
 異ある所あり中身の新刀より長さ大概九寸位東二の

切きのま較まもまるまるま巻まきま金ま具まもま總まてま金ま無ま垢まはま葵ま散まのま摸ま様まも
 目ま貫まもま三ま葉ま葵まのま彫ま上まけまあまるまをま彼まのま探ま索ま掛まりのま者まも
 是まよまりま嚮まはま短ま刀まのま来ま歴ま委ま々ま々ま听ま知まりまけんま岡ま部まあまりましまも
 察ませまぎまもまもま水ま府ま浪ま士まとま見ま認まめま逮ま捕まあませましましま計ませまも
 櫻ま田ま一ま拳まのま一ま個まあまりましまとま捕ま手まのま輩まハま打ま寄まとま鼻ま蝨まくま
 くとま飲まびまけまるま

近世櫻田紀聞卷之六終

